

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 16 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009 ～ 2012

課題番号：21530678

研究課題名（和文） 学校心理学の基礎概念の実践的利用に関する研究

研究課題名（英文） Practical Utilization of basic concepts in school psychology

研究代者

鎌原 雅彦（ KAMBARA MASAHIKO ）

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：90169805

研究成果の概要（和文）：教育心理学的理論として動機づけに関する理論を対象に、現職の教員が、基礎的な教育心理学的知見を得ることによって、よりよく理解されうると考える実際の教育実践での具体的な事例を収集した。これらをもとに教育心理学的理論をより実践的に理解しやすい典型事例を作成し、その評価を行った。さらに事例の分析を通して、伝統的教育心理学理論を再考する、あるいは複数の理論を統合的に理解する可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：Concrete instances in practical settings were collected that teachers would understand using the basic educational psychological concepts on the theory of motivation. Typical instances explaining psychological concepts were made based on these instances and were evaluated by teachers. Analysis of instances suggested the possibility of rethinking on the traditional theory and the integrated understanding of psychological theories.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：教育心理学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：学校心理学、動機づけ、現職教員

1. 研究開始当初の背景

近年、学校を取り巻く諸問題への関心の高まりの中から教育心理学のなかでもとくに学校に関連した領域を学校心理学と呼び独立した分野として捉えようという流れが形成されている（石隈、1999；福沢、2004）。

一方で学校心理学の基礎をなす教育心理学の基礎研究といわれる知見が、実践の学であるところの学校心理学のなかでどのような位置づけにあるかについては、明確になっていない。鎌原ら(2008)は、現職教員や学校心理士の有資格者を対象とし学校心

心理学の43のキーワードについて、その理解度と教育実践場面での有用性の認知を調査したが、例えば、「行動療法」とその理論的な基盤である「古典的条件づけ」や「強化子」について見ると、前者に対し後者は相当に理解度が低いことが明らかとなった。心理学に関心をもつ教員、学校心理士などの間でも、学校心理学の基礎をなす知見についての理解は断片的なものに止まっていることが伺われた。このように現状の学校心理学の知識の普及を見る限り、その知識が有機的に理解され教育実践上の助けになっているという状況にはほど遠いことが分かる。その原因の一つは、学校心理学と呼ばれている領域が、学問内容が寄せ集めのものにとどまっておろ、応用、実践と基礎研究との関係、構造などが十分に練られていないことにあると考えられる。個々の基礎的とされる心理学的な知見が実際に学校や教育実践の現場のどのような場面でどのように理解され、その有用性を発揮したかという具体的な事例の検討を通して、基礎研究の知見と実践の学としての学校心理学の関係をより明確なものとしていくことが課題となっている。

2. 研究の目的

個々の基礎的とされる心理学的な知見が実際に学校や教育実践の現場のどのような場面でどのように理解され、その有用性を発揮したかという具体的な事例について詳細に検討する。さらにそうした事例の検討を通して、学校や教育の現場で実践にかかわる者にとって有用性や意義が感じられるような形で心理学の基礎的知識を提供するための素材の在り方を検討する。

心理学的な知見が実際の現場で理解され、有用性を発揮した事例について様々なものがあげられるであろうが、そうした事例を総花的に取り上げ、整理するやり方では必ずしも、より深いレベルで個々の実践者や専門家が感じたことを理解し、その構造を明らかにすることは難しいと思われる。そこで、ここでは基礎的な心理学の知見の例として、動機づけや無力感に関するいくつかの代表的な理論を題材としてとして取り上げる。これらの理論の基礎となる考え方は実験などのいわゆる基礎研究によって積み上げられた知見に基づいていることが多いにもかかわらず、一方で、学習意欲の低下、あるいは、無気力、アパシー、引きこもりなどといった学校や教育現場でしばしば直面する問題と直結しているからである。

近年、心理学の領域についても、実践的、応用的な研究の重視が叫ばれているが、一見、教育実践とは無関係な基礎研究から、現場にある種の意義を感じさせる可能性を検討する。

3. 研究の方法

(1) 教育心理学的な知見が実際の現場で理解され、有用性を発揮すると思われる例について内外の文献を検討し、動機づけ関連概念の中でも、比較的理解しやすく、また、これまでの調査などから現職教員の関心も高い「内発的動機づけ」と「学習性無力感」の2つを中心的テーマとして取り上げることとした。それらの概念が自らの教育実践のなかでどのような体験事例と関連づけて理解されているかについて調査を実施した。教員免許更新講習の受講者である小中高等学校（特別支援学校含む）の教員166名を対象に、「内発的動機づけ」「学習性無力感」を含む学校心理学に関する12の専門用語についてその熟知度・実践場面での有用性について評定を行った後、これらの概念を中心に講義を行い、その教育現場での体験例を自由記述により収集した。

(2) (1)の調査に基づき、教育心理学における動機づけ概念によってより適切に理解されうる教育実践場面での典型事例を作成した。さらにこれらの典型事例について、現職教員を対象に理論的な適切さと教育実践現場でよくみられるという意味で、実践的適切性をもつものかについて調査した。学習性無力感5事例、内発的動機づけ6事例を用意し、現職教員150名を対象に適切性の評価とともに、事例についての自由記述を求めた。

(3) (2)の分析結果にもとづき、動機づけ概念において近年注目されている達成目標理論について取り上げ、それらの概念が教育実践の側にある現職教員のなかでどのような体験事例と関連づけて理解されているかを調査した。教員免許更新講習の受講者（現職教員）142名を対象に達成目標理論の概念をあてはめてみることでよりよく理解できる教育現場での事例を自由記述により収集した。

(4) 大学等で用いられている教育心理学等のテキストを収集し、動機づけに関する内容を扱っていたもの47冊について、動機づけについての教育心理学的概念がどのように取り上げられているかを検討した。

4. 研究成果

(1) 熟知度についてみると、「内発的動機づけ」は12項目中3番目に平均が高く比較的よく知られていたが、それでも「理解」しているのではなくことばは知っているという水準であった。自由記述についてみると、「内発的動機づけ」では、課題や物事への興味について(24%)や個人の目標の重要性について

(12%)の事例があげられたが、評価や賞賛を与えること(15%)、誉め方・叱り方について(8%)など外発的動機づけに関するもの、さらに教師の指導・家庭教育に関する記述も(21%)みられた。一方「学習性無力感」については、個人的な学習経験や学習観からの無力感の形成に関して多くの記述(25%)がみられたが、学習指導の工夫に関する記述(16%)や指導工夫によって改善がみられなかった事例や課題提示の失敗による無力感の形成の事例などがあげられた。

学習性無力感に関する教育現場での自由記述138事例についてテキスト分析を行った結果以下のカテゴリーを得た。学習カテゴリー32レコードは、一般的な学習を反映している。授業カテゴリー47レコードであり、教科では算数及び数学が21レコードでもっとも多く半数近くを占めている。算数・数学が無力感を形成しやすいことが伺えた。試験・課題カテゴリーは、おもに試験18レコードとその成績11レコード及び課題8レコードからなる。評価カテゴリーは、結果15レコードの他、よい28レコード、低い9レコード、悪い7レコードなど評価的な語からなる。動機づけに関連するカテゴリーとして、無力感は、40レコードで使用されていた。意欲カテゴリーは、おもに積極的な動機づけを示すやる気27レコードからなる。また自己カテゴリーは、自己30レコードの他、自信12レコード、劣等感・苦手意識計7レコードを含み、自己および学習に対する自己の意識を反映していると思われる。能力カテゴリーは、能力10レコード及び学力4レコード等からなる。一方教師・指導カテゴリーは、教師21レコードと指導及びそれを含む語9レコードで構成された。その他友達、問題のカテゴリーも形成され、無力感が友達関係や問題行動等とも関連していることが伺えた。カテゴリー間の共起関係にもとづくネットワーク分析を行った結果、学習への無力感は、学習、より具体的な授業や試験の成果に対する自己及び他者の評価とそれにもとづく自己についての考えによって形成されること、また教師の指導的な関わりは、授業、評価の他、自己概念にも影響している可能性が示唆された。また学習性無力感の考え方を適用できるとと思われる事例は、さまざまな理論的観点から理解可能な事例が示され、学習性無力感の概念の拡張や他の理論との統合的理解の可能性が示唆された。

(2) 内発的動機づけにおける外的な報酬ないし罰のみによる事例を別とすれば、学習性無力感の事例によりも内発的動づけの事例でより適切であると評価された。学校心理学用語の理解度の高い被調査者や教職経験の長い被調査者では、学習性無力感というひと

つの理論だけではなく、発達障害、信頼感、目標、生活体験あるいは自己決定等さまざまな視点から理解する可能性が示された。内発的動機づけの事例における、外的報酬ないし罰のみの事例は、その概念的適切性が低く評価されたが、こうした事例は基本的にオペラント条件づけの原理で理解されるという視点も提供され、条件づけと学習性無力感理論や自己決定理論の関連を再考する必要性も示唆された。これまでは学習性無力感理論と内発的動機づけ理論を中心にとりあげてきたが、古典的な行動理論やいまだとりあげなかった達成目標理論等を実践的な事例から統合的に理解する可能性が示唆された。

(3) 達成目標理論に関して自由記述であげられた事例は、児童生徒の目標志向性の違い、およびそれと児童生徒の動機づけのありようの違いに関するものと、教員の側が目標の考え方について、どのような信念を持っているか、あるいはどのような指導を行っているかに大別された。前者は人格変数としての目標、後者は状況要因としての目標と考えられる。さらに発達の目標志向の変化、遂行目標・学習目標の2つの目標の統合に関するものに分類できた。達成目標志向性と動機づけとの関連については、概ね理論的陳述と一致するものであった。事例から伝統的な2つの目標を必ずしも対立的に捉えるのではなく階層的な目標構造の中で統合的にとらえていく視点も提供された。一つには集団的目標と個人の目標の階層性において、一つには個人内のより大きな目標と個々の下位目標ないし道具的目標において、遂行目標と習熟目標が統合される可能性が示された。さらに自己決定理論等他の理論との統合的理解の可能性など、動機づけ理論についての新たな視点が得られた。

(4) 動機づけに関する内容を扱っていたテキスト47冊を検討したところ、内発的動機づけ、学習性無力感など比較的共通した概念が取り上げられていた。また、それらの記述を実践的な利用という観点から、①そのテキストが基礎理論の記述にのみ終始しているもの(30点)、②実践的な利用につながる記述、動機づけを高めるための具体的な方略等の記述があるもの(15点)、③基礎理論を実践場面に沿って理解するための具体例、事例などの記述があるもの(2点)の3つのカテゴリーに分類し、今後のテキストのあり方についてはさらなる工夫が望まれた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

- ① 鎌原雅彦・大芦治・蘭千壽・岩田美保、
動機づけに関する教育心理学的概念としての達成目標理論について現職教員がイメージする教育実践事例の分析、千葉大学教育学部研究紀要、査読無 61 巻, 2013, 233-243
- ② 大芦治・岩田美保・鎌原雅彦・蘭千壽、
教育心理学関連科目のテキストにおける動機づけ関連領域の扱われ方について、千葉大学教育学部研究紀要、査読無 61 巻, 2013, 59-63
- ③ 鎌原雅彦・蘭千壽・大芦治・岩田美保、
動機づけにおける教育心理学的概念に関する教育実践事例の適切性について、千葉大学教育学部研究紀要、査読無 60 巻, 2012, 301-314
- ④ 鎌原雅彦・大芦治・金子功一・岩田美保・中澤潤・蘭千壽、
動機づけにおける教育心理学的概念に関する教育実践事例の適切性について、千葉大学教育学部研究紀要、査読無 59 巻, 2011, 151-157

〔学会発表〕(計 2 件)

- ① 蘭千壽・鎌原雅彦・大芦治、
動機づけ関連概念の教育実践事例の適切性の分析、日本学校心理士会 2011 年度大会、2011
- ② 金子功一・鎌原雅彦・大芦治・岩田美保・中澤潤・蘭千壽・三浦香苗、
現職教員が動機づけ関連概念からイメージする事例の分析—内発的動機づけ、学習された無力感を例に一、日本教育心理学会第 52 回総会発表論文集、2010

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鎌原雅彦 (KAMBARA MASAHIKO)
千葉大学・教育学部・教授
研究者番号：90169805

(2) 研究分担者

蘭千壽 (ARARAGI CHITOSHI)
千葉大学・教育学部・教授
研究者番号：90127960
中澤潤 (NAKAZAWA JUN)
千葉大学・教育学部・教授
研究者番号：40127676
大芦治 (OASHI OSAMU)
千葉大学・教育学部・准教授
研究者番号：30289235
岩田美保 (IWATA MIHO)
千葉大学・教育学部・准教授
研究者番号：00334160